

幼児教育と小学校教育との連関について

～生活科教育内容を通して～

徳 永 幸 枝

1 はじめに

小学校の砂場で生活科の時間に山をつくり、水を流し、遊んでいる子ども達。幼稚園や保育所の砂場で、体験した遊びである。幼稚園や保育所での遊びや生活が小学校での学びとどう連関し発展していくのか、小学校生活科の内容から考えてみたい。

小学校で平成元年から始まった生活科も、平成10年に改訂が行われ、平成19年には一部補訂が行われた。

中野重人氏は生活科を新設した背景とその要因は以下の4点である。

- ① 低学年児童の発達に適合した教科の設定
- ② 幼稚園教育と小学校教育の接続・発達を図ること
- ③ 今日の児童の自然離れや体験不足の実態への対応
- ④ そして、これまでの低学年の社会科や理科の学習指導に対する反省

生活科は直接体験を重視した学習が展開されてきたが、平成10年の改訂では、生活科が体験、活動中心になり、身近な社会や自然、人とかかわる知的な気づきが十分でないという状況から、地域や児童の実態に応じた弾力的な指導ができるように、12の内容を8の内容（学校と生活・家庭と生活・地域と生活・公共物や公共施設の利用・季節の変化と生活・自然や物を使った遊び・動植物の飼育、栽培・自分の成長）に精選し、1・2年で習得できるように示している。

小学校に生活科が設置され幼稚園教育と小学校教育の接続・発展が図られてきたが、交流を中心とした連携が主となり、一定の成果は出ているが、ここでは、教育内容や教育方法についての共有化を図るための方策について、小学校の生活科の実践から幼稚園教育との連関を考えてみる。

2 生活科の特質

生活科の教科目標を簡条書きに示すと、以下の5点である。

- ① 具体的な活動や体験を通し
- ② 自分と身近な社会や自然との関わりに関心を持ち
- ③ 自分自身や自分の生活について考え
- ④ 生活上必要な習慣や技能を身につけ
- ⑤ 自立への基礎を養う

このような目標をもった生活科は3つの自立を目標としている。

学習上の自立 ⇒ 自分にとって興味関心があり、価値があると感じられる学習活動を進んでおこなうことができることであり、自分の思いや考えなどを適切な方法で表現できる。

生活上の自立 ⇒ 生活に必要な基本的な生活習慣や生活技能を身に付け、身近な人々、社会及び自然と適切に関わることができるようになり、自らより

良い生活を創り出していくことができる。

精神的な自立 ⇒ 自分のよさや可能性に気づき、意欲や自信をもつことによって、現在及び将来における自分自身のあり方を一層強化していくことができる。

また、改訂で重視されている「人のかかわり」で考えてみると、学校や家庭を支えてくれる人・近所の人・店の人・身近な幼児・高齢者・障害のある児童生徒・外国の人等と直接かかわることによって、集団や社会の一員としての自分のあり方を考えたり、人と適切に接したりすることができるようになることを挙げている。

新しい生活科でめざしていることは問題解決力・生活の知恵・個性を生かす・かかわる力・ふるさとへの愛着等である。

3 遊びと生活科との関連

小学校における生活科の新設は、小学校教育のさらなる充実とともに、小学校と保育所・幼稚園の双方がお互いの教育への理解を深めることで、接続への橋渡しをすることを意味していることは確かである。だからといって、生活科の遊びと幼児期の教育の遊びが同一であると考え、そのことによって、両者の教育方法、内容が連携したとすることは安易であり、問題があると思われる。

事実、「幼稚園教育要領解説」（文部省、1998）には、小学校との連携について「幼稚園においては、この教育要領に示されていることに基づいて、幼児期にふさわしい教育を十分に行うことが小学校との接続を図る上で最も大切なことであり、いたずらに小学校の教科内容に類似した指導を行うことのないようにしなければならない」と述べられている。

小学校の生活科は各教科と同じく教科書も用意され、れっきとした教科として位置づけられている。だとすると、保育所・幼稚園における遊びと生活科における遊びでは、教育方法、内容のうえでも異なると考えるべきではないだろうか。

生活科では「具体的な活動や体験を重視する」ことが第一の「特色」であり、「遊びも学習」とし、「具体的な活動や体験」が単なる手段や方法ではなく、内容であり、方法であり、目標であるとしている。文部省「小学校指導書 生活科編」（平成元年6月55～56頁）によると、遊びは児童が最も素直にかかわっていくことのできる活動である。とりわけ、児童が課題意識を強く抱いて遊ぶとき、その活動へのかかわりは一層強まる。自分がこうしたいという願いをもって、取り組んだその活動を実現するために、児童は対象への働きかけの仕方や友達との協力の仕方をいろいろ工夫する。こうして児童は自分にできると考えた事柄を実際に試してみるし、また、友達とのかかわり方を更に学んでいく。その結果、課題をやり遂げたときに味わう成功の感激は極めて大きい。「遊びも学習である」というとき、遊びは人間としての成長に必要なさまざまな基礎的な能力の発達にとって、きわめて重要な役割を果たしている事を意味している。創造性や社会性、知的な能力や運動能力など、人間の成長に必要な基礎的な能力が遊びのなかで、育つということである。そのような遊びのもつ教育力を生かし、遊びと学習を理論的・実践的に統一していくことがこれからの課題である。

4 生活科の実践を通して（事例1 宇部市立藤山小学校1年生）

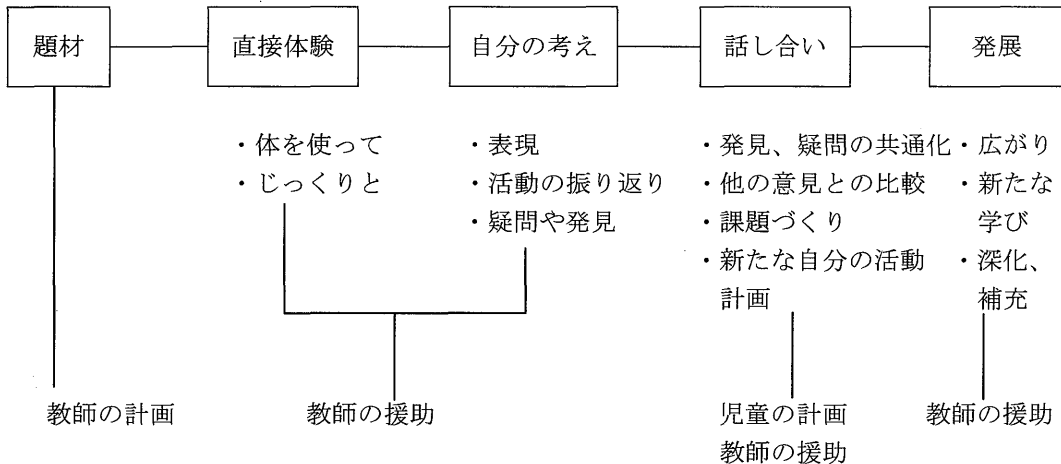
本事例は1年生が「ヤゴ救出大作戦」として、ヤゴをプールから取り、育て、トン

ボになるまでの学習である。自分の疑問や発見について、自分で確かめ、進んで生き物と関わろうとする態度を育てる活動で、藤山小学校の1年生が毎年経験する、楽しい生活科の活動として、位置づけられている。

(1) 生活科の学習で大切にしてきたこと

- ① 直接体験・・・本物との出会い（体で 五感を通して）
- ② 自分とのかかわりに関心
- ③ 自分自身や自分の生活について理解
- ④ 生活上必要な習慣や技能

(2) 疑問や発見を大切にする生活科の学習の展開



(3) 「五感や発見」を大切にするために

- ① 五感を通じた体験の場をたつぷりと設定する。そこから「疑問や発見」が生れる。
- ② 自分の思いや考えを表現する時間を大切にする。ここから、話し合いの源が生れる。
- ③ 話し合いの場を大切にする。そこから、共通「やりたいこと」、即ち「課題」が生れる。また、自分の考えと異なった視点にふれることにより、さらに、自分の考えを深める場ともなる。
- ④ 学習計画を柔軟にとらえる。これにより、「疑問や発見」を大切にした学習を進めることができる。
- ⑤ 学習の連続性を大切にする。

(4) 授業の実際 題材 「ヤゴ救出大作戦」

① 単元について

1年生の児童はカナヘビやザリガニ、バッタなどをとって学校に持ってくる児童が多く、生き物への関心が高い。しかし餌をはじめ、育て方についてはよく知らなかったり捕ることのみを楽しんだりで生き物を死なせてしまうことが多い。また、生き物を嫌がったりする児童もいる。プール清掃の時期となり、プールのヤゴを捕って育ててみることにした。

ヤゴを育てる活動は、池や小川の生き物に関心を持つとともに、生き物の体の

つくりや成長の変化など、科学的な見方を育てることができる。また、生き物にふれあう楽しさを味わったり、生き物の命を大切にしようとする気持ちを育てたりすることができる教材である。

捕ったヤゴは、一人ずつが自分の水槽で育て、すみかづくりから餌やりなど責任を持たせて、自分のヤゴとして、愛着を持って育てていける。育てる中で子どもたちが気づいたことは絵や作文で表し、活動を振り返ったり、新しい活動を引き出す機会とした。また、その都度、発表し合い、それぞれの問題をみんなの問題としてとらえ、考えを広げたり深めたりさせた。自分のもった疑問については、自分なりに追求し、確かめていくような働きかけもしていた。

② 単元の目標

- ・身近な自然に興味・関心を持ち、進んで生き物に関っていこうとする。
- ・生き物に関る中で生じた疑問や発見について、自分なりに確かめようとする。
- ・体験したことや自分の思い、考えを、いろいろな方法（言葉・絵・動作化など）で表現する。
- ・生き物の命の大切さに気づく。

③ 学習計画（16時間）

一次 ヤゴとり大会の計画を立てよう。（2）

- ・ヤゴとり大会に必要なものを話し合う
- ・ヤゴのすみかを作ろう

二次 ヤゴとり大会をしよう。（2）

- ・ヤゴと仲良くなろう。

三次 ヤゴを育てよう。（10）

- ・どんなえさを食べるだろうか。
- ・毎日えさをあげよう
- ・ヤゴの観察をしよう。（体のつくり、泳ぎ方。えさのとり方、種類、体の変化）
- ・トンボになるまでしっかり観察する。（羽化の時期、羽化の様子）
- ・トンボの観察をしよう。（種類、つくり、雄と雌の違い）

四次 自分の思いを文や絵で表そう。（2）

- ・トンボの一生を考える。
- ・生き物の命や長さについて調べる。
- ・もし、プールでヤゴを捕らなかつたらどうなっていたでしょう。

④ 実践を終えて

6月12日にヤゴとりをしてから、はや1ヶ月が過ぎようとしている。もう、そろそろトンボになっていいはずである。虫の好きな児童は毎朝、雨の日も風の日もアカムシとミミズを探しに溝に出かけている。そして教室にもどり、えさをあげている。

- ・ヤゴがアカムシを食べている様子をじっと見ている子
- ・スポイドで水をていねいにかえている子
- ・ヤゴが死んでいなくなった友達にヤゴをあげている子
- ・アカムシを探せなかった友達にアカムシをあげる子
- ・オタマジャクシやミミズを食べるかどうか実験している子

- ・ ヤゴと手のひらで遊んでいる子
- ・ ヤゴの脱いだ殻を集めている子

朝学までの時間や中間タイム等を使って、いろいろと自分なりに楽しんでいる。ヤゴを育てて3週間、ついにトンボが誕生。朝、ヤゴのぬけがらが止まり木についていたのを発見。そばの壁にトンボが止まっており、早速ある子がバケツに木の枝と水、草を用意してトンボを枝に止まらせ、じっと観察していた。すぐに図鑑でトンボの名前を調べ「ノシメトンボ」と教えてくれた。

⑤ 考察

児童は題材と出会い、目を輝かせ、意欲的に活動していった。身近な「トンボ」ということで、トンボが飛んでいく姿を想像しながら、生き生きと取り組んだ。

直接体験を重視した学習を展開することが「生活科」の本質と考えるとき、体験をより豊かなものへつなげるためには、「生き生きと」「おもしろい」「楽しい」「好きなこと」の活動の場を設定しておけば、それだけで、子どもたちは、生き生きと活動していく。特に、その時その時を生きる1年生にとっては、そのこと自体、とても大切なことである。このことは、幼児教育が遊びの中で環境を通して行われ、さりげなく仕組まれた教材との出会いにより、幼児自らの発見やかかわりを通して行われことと同じである。

新指導要領が「単に活動にとどまっていて、自分と身近な社会や自然、人にかかわる知的な気づきを深めることが十分でない状況が見られる。」と指摘しているが、この実践では、直接体験を重視した学習を展開しながら、そこから生まれる「疑問や発見」を大切にしていくことが、「知的好奇心（次に〇〇してみたい）」をかきたて、より豊かな学びにつながると考える。

5 おわりに

9月のある日、梅光幼稚園に子ども学部2年生と幼稚園訪問をした。その際、園児の1人が大切に持ってきたかたつむりの家族を見せてくれた。その飼育箱には、お父さん、お母さん、お兄さん、お姉さん、赤ちゃんと計7ひきのかたつむりがいた。畑で見つけ、大切に育てていると話してくれた。豆粒ほどの、赤ちゃんかたつむりのかわいいこと、じっと見つめる事しかできなかった。あくる日もまた、大切そうに飼育箱を持って来て、みんなに見せていた。長年小学校教員をしてきた私は、これは教材として何とかならないかと思いついてしまう。この教材を使って、何を学ばせようかとか、命の大切さ、かたつむりの育て方、えさは何等、いろいろな指導案が浮かんでくる。

小学校では、教えるべき内容やねらいに沿って教材を毎時間準備する。一方、幼稚園では身近にあるすべてのものが教材となる。教材と園児の生活とが一体化しているのが幼稚園の環境であり、そのように仕組むのが幼稚園の環境でもある。幼稚園では四季折々、季節に応じた教材や環境を整えている。そして、生活や状況の文脈の中で環境から学んだことが、園児の中で豊かな学びとなって、育まれていく。

小学校教育と幼稚園教育、保育園教育の違いはどこにあるのかと学生から尋ねられ戸惑う事がよくある。

幼児が何かに夢中になっているとき、その幼児のよさがあふれ出し、輝いている姿がある。その輝きに心から感動し、うなずき、寄り添っていく教育をしていくことの

中に学びが生まれ、この学びの基盤が小学校教育がめざしている基礎・基本につながっていると考える。幼稚園教育に於いて、保育者は日々の子どもの活動を漠然と情緒的に観察するのではなく、その中で子どもたちが獲得していく価値ある知識・論理・技能・思考方法などについても、幼児の姿から、見いだしていかなければならない。そうでなければ、子ども達は自らが学びつつある人間的能力や論理・知識などを自覚しないまま風化させてしまうことになる。幼稚園と小学校は確かに違いはあるが、決して、相反するものではない。

両者のよいところを融合させ、それぞれの独自性を踏まえた上での連続性を図ることが必要となる。このことから、生活科の学習内容、方法においては、幼稚園教育の環境から学ぶことも多く、「環境」に注目した、幼小連携のカリキュラムも生まれ、連携の手がかりの発見にもつながると考える。

参考文献

- 小学校学習指導要領解説 生活編 文部科学省 平成11年5月
保育ライブラリ 幼児教育の方法 北大路書房 2004年
生活科授業の創造と実践 生活科教育法 現代教育社 平成6年
宇部市立藤山小学校 研究集録 平成13年
新学力観に立つ体験学習の工夫と展開 教育開発研究所 平成7年
初等教育資料 10月号 東洋館出版社 平成19年